

令和3年度の山部会の活動進捗報告

1. 山部会の目標とテーマ

山部会で抽出された課題、活動テーマ、今年度の活動目標を以下に示す。

課題	活動テーマ	次年度の活動目標
①人と地域 の問題	流域圏担い手 づくり事例集	<ul style="list-style-type: none"> ○持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「<u>流域圏担い手づくり事例集Ⅲ</u>」を刊行する。 ○特に<u>山、川、海のエリアと都市をつなぐ活動</u>に着目して取材を行う。 ○<u>川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動</u>とする。 ○事例集の活用方法と、<u>今後の事例集づくりの方向性</u>について検討する。
	山村ミーティング	<ul style="list-style-type: none"> ○ガイドラインの作成においては、林業技術者に直接意見を伺うなど、<u>懇談会との連携を強化する（担い手の創出）</u>。 ○矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、更に検討を行っていく。 ○矢作川流域の森を守っているプロたちが、<u>その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「矢作川水源の山づくりガイドブック」の策定に取り組む。（山村ミーティングと森づくりガイドラインの協働）</u>
	森づくり ガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> ○森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、<u>流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。</u> ○水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、<u>矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。</u>
②森の問題	木づかい ガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> ○矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ~しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、<u>流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。</u> ○矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「<u>矢作川流域ものさし・私の流域物語</u>」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって、<u>全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。</u> ○「<u>矢作川流域ものさし・私の流域物語</u>」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。 ○「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる<u>市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。</u> ○こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり=プレイスメイキング」によって<u>身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。</u> ○こうしたプレイスメイキングに際し、<u>地域住民や地域の子供たちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。</u>

2. 今年度の活動実績

今年度の山部会WG活動実績を以下に示す。

活動内容	日時	場所	活動内容
第59回WG（根羽） 20名参加（内オンライン参加8名）	6月25日（金） 13:30～17:05	根羽村老人福祉センター 「しゃくなげ」	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の活動方針を確認、活動内容の話し合い。 ・4つのテーマの進捗報告と意見交換 ・バスツアーと公開講座について ・矢作川水系流域治水プロジェクトについて
第60回WG（恵那） 32名参加（内オンライン参加10名）	10月1日（金） 13:30～17:00	恵那市消防防災センター 3階研修室	<ul style="list-style-type: none"> ・4つのテーマの進捗報告と意見交換 ・恵那市の太陽光発電の現状について
第61回WG（豊田） 23名参加（内オンライン参加5名）	11月5日（金） 13:30～17:05	豊田森林組合庁舎 第2・3会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・4つのテーマの進捗報告と意見交換 ・豊田の森づくりの成果と課題について
第13回「まとめの会」（岡崎） 〇〇名参加（内オンライン参加〇名）	1月22日（金） 13:30～16:30	岡崎市額田センター 「こもれびかん」	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のWGのふりかえりについて ・次年度の活動目標、活動計画について

※参加人数は事務局含む

フィールドワークの活動実績を以下に示す。

活動内容	日時	場所	活動内容
FW（根羽） 12名参加	6月26日（土） 9:30～12:00	①コウヨウザン植栽箇所 ②村有林皆伐地 ③根羽村森の交流館 ④ネバーランドフォレストガーデン	<ul style="list-style-type: none"> ・コウヨウザンの有用性の把握 ・皆伐地と今後の植栽木の検討 ・森の生活や森林体験の場の確認 ・山地酪農実験箇所の視察
FW（恵那） 15名参加	10月2日（土） 9:30～12:00	①恵那市飯地町の太陽光発電施設の見学	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電の建設の状況把握
FW（豊田） 16名参加	11月6日（土） 9:30～12:00	①豊田市御内町のゴンゾトレイルの視察	<ul style="list-style-type: none"> ・鼎館において御内町の歴史やゴンゾトレイルの目的や活動内容の説明 ・ゴンゾトレイルの現場で、活動内容の説明と体験

※参加人数は事務局含む



写真 FWの実施状況

（左：コウヨウザン試験植栽地（根羽村）、中：太陽光発電施設の見学（恵那市）、右：ゴンゾトレイルの見学（豊田市））

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく
社会背景の変遷と
望ましい将来像

STEP1

過去と現在を
知る

理解と情報共有を
促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会で対応

**実現に向けた
課題と解決手法**

STEP2

未来像実現に向けた
課題と解決手法を
考える

情報共有を踏まえ、まず「人の問題」をテーマに解決手法を検討

→ 市民会議
→ 地域部会で対応

STEP3

できることから
活動を
実践する

人と山村

森林

高度経済成長前から後へ

- 自給的経済、自立、自治、誇りがあった。
- 百業をやっていた。

- 薪炭林施業が行われていた。
- 最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。
- 藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。

現代

- 若者が中下流の都市へ流出した。
- 拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がなくなった。

- もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。
- 国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。

近未来
(放っておくとどうなるか)

- 山村における若者の就業機会が乏しい。就業できても定着できない。
- 現代では、山村は過疎化、少子化、高齢化、核家族化が進行している。

- もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。
- 管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。

望ましい
未来像

- 限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニティが崩壊する。
- 国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。

- 林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再生林の放棄が起こり、森林の水土保持機能が喪失する。
- 不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。

- 流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。
- 自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。

- 流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。
- 木材生産を主目的として管理する森林と、水土保持機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生(担い手作り)から！

当面の課題1 誰がやるか(人と地域の問題)

課題

- 現金収入、仕事、医療、教育など、出発点に到達する以前の問題が山積。

解決手法(例)

- 既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定やEターンの若者のミーティングを通じ、山村再生の担い手作りを支援する具体的な方策を検討する。
- 上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興(流域フェアトレード)の推進(中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など)

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために
先ず“人づくり”が必要
そのうえで“森づくり”にも
取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ

- 山村再生担い手づくり事例集
- 成功事例1
- 成功事例2
- 失敗事例1
-

当面の課題2 何をやるか(森の問題)

課題

- 流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
- データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。

解決手法(例)

- 「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
- モデル林の設定とモニタリング
→ ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定

3. 各テーマの活動進捗報告

3.1 流域圏担い手づくり事例集

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

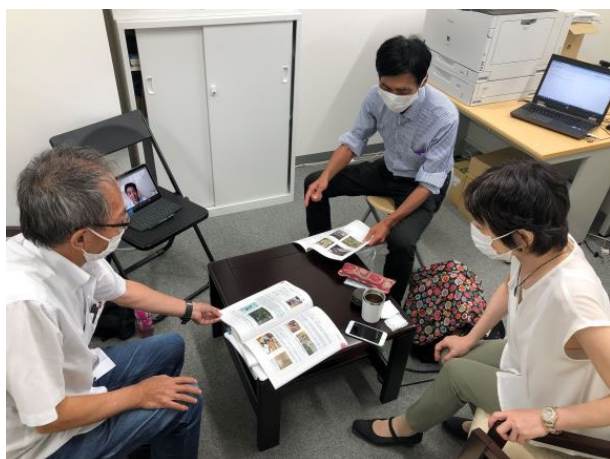
【今年度の活動目標】

- 持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」を刊行する。
- 特に山、川、海のエリアと都市をつなぐ活動に着目して取材を行う。
- 川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。
- 事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。

(2) 今年度の活動成果

1) 流域圏担い手づくり事例集の作成

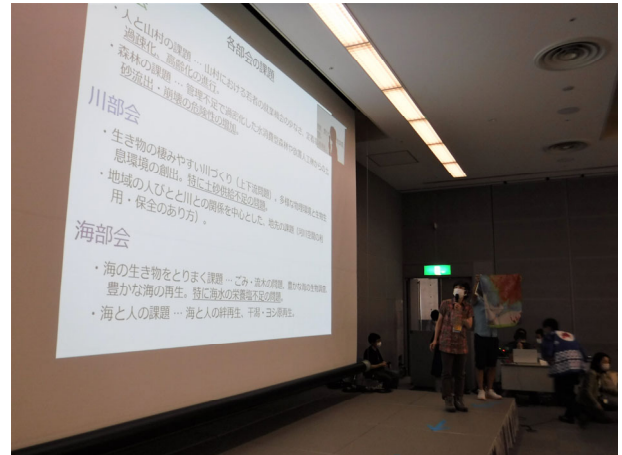
- ・新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、8月に予定されていた山部会（岡崎）が延期となった。この延期をうけ、懇談会活動の停滞を避けるため、山・川・海の有志からなる部会連携調整（通称：ミライ会議）を設け、その中で事例集の作成についても検討を行った。
- ・前年度の10年誌作成過程で、流域の課題を解決するためには、もっと都市住民を巻き込むことが必要という認識が共有された。その先進事例を対象に、これまでと取材の形式を変え、取材対象のプロジェクトに関わる複数のメンバーに取材し、プロジェクトの全体像を立体的に浮かび上がらせることをめざした。
- ・今年度は、名古屋の学童保育木質化プロジェクトを取材対象とし、ミライ会議に「森と子ども 未来会議」発起人の鈴木建一氏を招聘。その後、「あおぞら学童保育クラブ」、「松栄第一第二学童保育クラブ」「山里学童保育クラブ」（以上名古屋市）、「季の野の台所（知多郡美浜町）」を訪問。鈴木建一氏、学童保育の設計を行った「東海林建築設計事務所」の東海林修氏、「季の野の台所」の森川美保氏らに取材を行った。



部会連携調整の実施状況（左）と事例集の取材風景（右）

2) “いい川”・“いい川づくり”ワークショップにおける懇談会と事例集のPR

・10月に岐阜市で開催された「第13回“いい川”・“いい川づくり”ワークショップ in 中部」において、洲崎氏より懇談会の活動概要、流域圏担い手づくり事例集の作成状況、設立10年の成果と課題について、全国に向けて発信した。



ワークショップの会場（左）と流域圏懇談会の発表風景（右）

矢作川

- ・長野、岐阜、愛知の3県を流れ三河湾に注ぐ一級河川
- ・河川延長：118km、流域面積：1,830km²
- ・河口から34～80kmの範囲に農業、工業、上水道、発電用の7つのダム
- ・平均水利用率 — 40.5% (1977～2012 平均)

矢作川流域圏懇談会の組織

- ・国交省豊橋河川事務所が2010年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取組を行い、流域圏全体の発展につなげることをめざし設立。
- ・学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが参加。

矢作川流域圏懇談会 10年間の活動

2010～19年の10年間に**230回**の活動・会議を開催し、のべ**5,600人**が参加！

流域圏担い手づくり事例集

中山間地振興や川や海的环境保全に関わる活動を行う102団体に取材を行い、計6冊の「山村再生担い手づくり事例集」と「流域圏担い手づくり事例集」を発行。

各部会の課題

山部会

- ・人と山村の課題 … 山村における若者の就業機会の少なさ、定着率の低さ、過疎化、高齢化の進行。
- ・森林の課題 … 管理不足で過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性の増加。

川部会

- ・生き物の棲みやすい川づくり（上下流問題）。多様な物理環境と生物生息環境の創出。特に土砂供給不足の問題。
- ・地域の人びとと川との関係を中心とした、地先の課題（河川空間の利用・保全のあり方）。

海部会

- ・海の生き物をとりまく課題 … ごみ・流木の問題、豊かな海の生物調査、豊かな海の再生。特に海水の栄養塩不足の問題。
- ・海と人の課題 … 海と人の絆再生、干潟・ヨシ原再生。

矢作川流域圏懇談会 次の10年間の課題

2020年に懇談会が設立10周年を迎えるのを機に、10年誌を作成。

- ・成果だけでなく組織の再構築など運営する中で苦労した過程、会を支えたキーパーソンの声、事例集を振り返った座談会など、懇談会のリアルな軌跡を辿れる内容にした。

10年間で懇談会の活動は一定の成果を上げてきた。しかし、懇談会の継承につながる次世代のメンバーの参加がない。

今後、活動を若い世代につなげていくにはどうすればいいだろうか？

“いい川”・“いい川づくり”ワークショップ発表資料（洲崎氏作成 抜粋）

3.2 山村ミーティング

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

- 矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、さらに検討を行っていく。
- 矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「矢作川水源の山づくりガイドブック」の策定に取り組む（森づくりガイドラインとの協働）。

(2) 今年度の活動成果

1) 矢作川感謝祭における流域の森林組合員の交流

- ・これまでの矢作川感謝祭において、流域の森林組合（根羽、恵南、豊田、岡崎）の参加は定着してきた。今年度は、このイベントをどのように活用するかを検討を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染の収束が望めないことから、イベント自体が中止となった。

2) 矢作川水源の山づくりガイドブック策定の進捗状況

- ・「矢作川源流の山づくりガイドブック」の策定にあたり、流域の各森林組合宛に会議の開催依頼文を作成し、送付した。

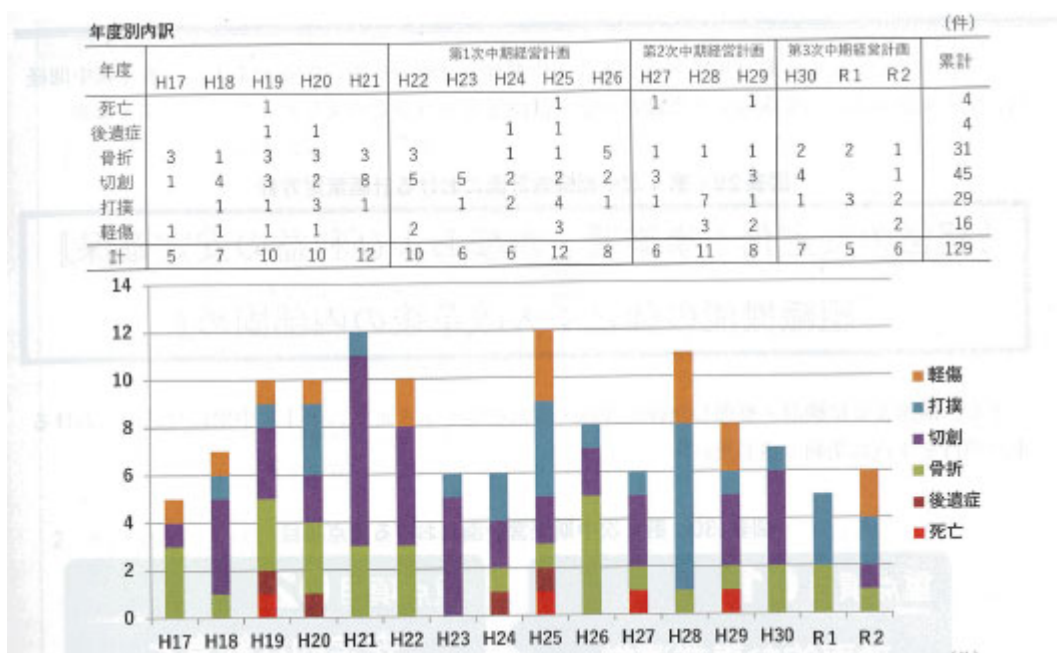
<p style="text-align: right;">令和 3 年 6 月 21 日</p> <p>各森林組合長 宛</p> <p style="text-align: right;">矢作川流域圏懇談会山部会 座長 蔵治光一郎 矢作川森の健康診断実行委員会 代表 丹羽健司</p> <p style="text-align: center;">矢作川水源の山づくりガイドブック策定会議の開催について（依頼）</p> <p>日頃は流域の森づくり活動推進にあたっては大変お世話になっています。さて、このたび下記のとおり学習交流イベントを開催しますので、該当する現場森林技能職員への周知および自主的参加の促進をお願いします。また、参加希望者については出張扱い等での派遣の取り計らいをお願いします。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <ol style="list-style-type: none">1 名称：矢作川水源の山づくりガイドブック策定会議（通称：矢作川流域山づくりWS）2 日時：令和 3 年 7 月 26 日（月） 9 時～16 時（コロナ感染の状況によっては延期あり）3 会場：岡崎森林組合（岡崎市明見町田代 9-1） および作業現場4 参加費：無料 昼食は各自、持参5 内容：経験豊富な現場森林技能者と森林研究者が胸襟を開いて、 現行森林作業で感じる、不合理な慣習や不合理的な指示、規則、一見科学的でも違和感のある知見など、山づくり現場での矛盾や疑問を洗い出し解決策を探ります。 座学だけでなく課題を抱える現場に立って議論を深めます。6 今後の予定： 令和 3 年度に 4 回、令和 4 年度に 4 回、4 組合持ち回りのほぼ隔月開催とし 令和 5 年 1 月に 8 回の議論を反映した「矢作川流域の山づくりガイドブック」刊行・発表を目指す。7 参加対象： 岡崎森林組合、豊田森林組合、恵南森林組合、根羽村森林組合の 3 県 4 組合に所属する現場森林技能者と森林研究者（東京大学蔵治光一郎教授ほか）8 その他：換温、消毒、マスク着用はもとより、3 密を避けるなどコロナ感染防止対策を徹底します。 そのため、第 1 回は各組合 2 名までと研究者グループと事務局の少人数開催とします。9 申し込み：組合ごとに取りまとめて下記まで（〆切 7 月 19 日）	<p>現場力が机上の空論を喝破する 科学が日々の山仕事の不条理を解明する</p> <p>力を合わせ現場を科学し「矢作川流域 山づくりガイドブック」をつくらう！</p> <p>百戦錬磨の現場力と新進気鋭の科学で これまで無意識に続けてきた森林作業や どう見ても不合理的な指示や規則、 一見科学的でも違和感のある知見、 それらを今一度冷静に棚卸して 本当に弊に落ちる山づくりの手引きをつくらう！ 持続可能な山仕事でこそ流域は持続可能になる。 心ある山づくりのプロたちよ、未来のために集まれ！</p> <p style="text-align: center;">第 1 回 矢作川流域山づくりWS 日時：令和 3 年 7 月 26 日（月）9～16 時 場所：岡崎森林組合（座学と現場）</p>  <p>パンデミックや異常気象の中、山村部ではウッドショックや無秩序な不動産投機が懸念されています。2000 年の東海（恵南）豪雨以来全国では豪雨災害が頻発していますが、矢作川はぼっかり空白地域でいつ災害が発生しても不思議ではないと言われています。本物の山づくりが益々求められています。山仕事のプロである皆さまが、日々の山仕事で感じる疑問や不条理が、根拠となるべき科学的知見や制度が曖昧なまま、見過ごされています。それらの関係や課題を研究者と一緒に明らかにして、課題解決のために必要な技術と知見や制度を山づくりガイドブックにまとめたいと思います。技術を身につけ知見を学び制度を変えていくことから誇り高い山仕事と持続可能な山づくりができる仕組みを実現できたらと願っています。</p> <ul style="list-style-type: none">● 7 月 26 日（月） 9～16 時：岡崎森林組合● *6 月 14 日に予定されていた第 1 回は緊急事態宣言延長により今回に延期しました。● 内容 ①会議の趣旨と経緯説明（「矢作川流域林業担い手 100 人ヒヤリング」結果より） ②南九州の山で起きていることとこれからの矢作川の施策（東京大学：蔵治光一郎教授） 矢作川森の研究者グループの紹介 ③地域の状況と作業上の課題（岡崎森林組合現場技能者から） ④（昼食）現地踏査（現場の自慢と葛藤披露） ⑤フリートーク ⑥次回以降の進め方（課題、順番ほか） *参加費無料：山林現場に入る格好でおいください。 *コロナで愛知、岐阜、長野いずれかで緊急事態宣言発出期間内になった場合は延期します。 *当日 37.5 度以上の発熱のある場合は参加をお控えください。
---	---

会議の開催依頼文（抜粋）

- ・7月下旬、岡崎森林組合において「矢作川水源の山づくりガイドブック策定会議（通称：矢作川流域山づくりWS）を行った。ここでは、「矢作川流域林業担い手100人ヒヤリングの結果（丹羽氏）」、「南九州の山で起きていることとこれからの矢作川の施業（蔵治氏）」、「地域の状況と作業場の課題（岡崎森林組合現場技能者）」より話題提供を行い、課題解決に向けた意見交換を行った。
- ・2022年1月、豊田市御内市有林事務所において第2回を開催した。昨年6月から始まった豊田森林組合の「現業MTG」の取り組みについて藤澤氏から報告があり意見交換を行った。



会議の様子（上段：岡崎市、下段：豊田市）



豊田森林組合における労働災害の発生状況

3.3 森づくりガイドライン

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

- 矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「矢作川水源の山づくりガイドブック」の策定に取り組む（森づくりガイドラインとの協働）。
- 森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進捗を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。
- 水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。

(2) 今年度の活動成果

1) 流域圏全体として調和のとれた森づくりに関する議論

- ・流域市村において、森林環境譲与税の使い道に関する取り組みを、行政や森林組合の担当者より報告いただき、意見交換を行った。
- ・根羽村では、根羽村森林組合を主体に伐採・製材加工・販売を通して、林業の一次、二次、三次産業による6次産業化を確立している。これを「根羽村トータル林業・まもる・つかう・つなぐ」と称して、林業のあるべき姿を追求していることを共有した。
- ・豊田市の森林施策については、同市森林課の小川氏より「豊田市の森づくりの成果と課題について」をテーマに話題提供をいただいた。同市は全国に先駆けて森林整備を実施しており、森林環境譲与税は、森林整備の安定化や持続可能な森林整備に向けて投資を行っている。そのために、森林組合と連携し、団地化推進プロジェクトによる間伐の推進、森林整備に関する人材育成や普及啓発、木材利用を進めていることを共有した。
- ・岡崎市の森林施策については、同市森林課の今泉氏より「岡崎市の森林環境譲与税を使った森林施策について」をテーマに話題提供をいただいた。同市は、愛知県初の森林経営管理法による森林整備を一般社団法人奏林舎とともに進めていることを共有した。また、森林の整備を担うべき人材の育成及び確保のため、人工林間伐講座・間伐ボランティア活動団体・森の女子会の支援についての言及があった。



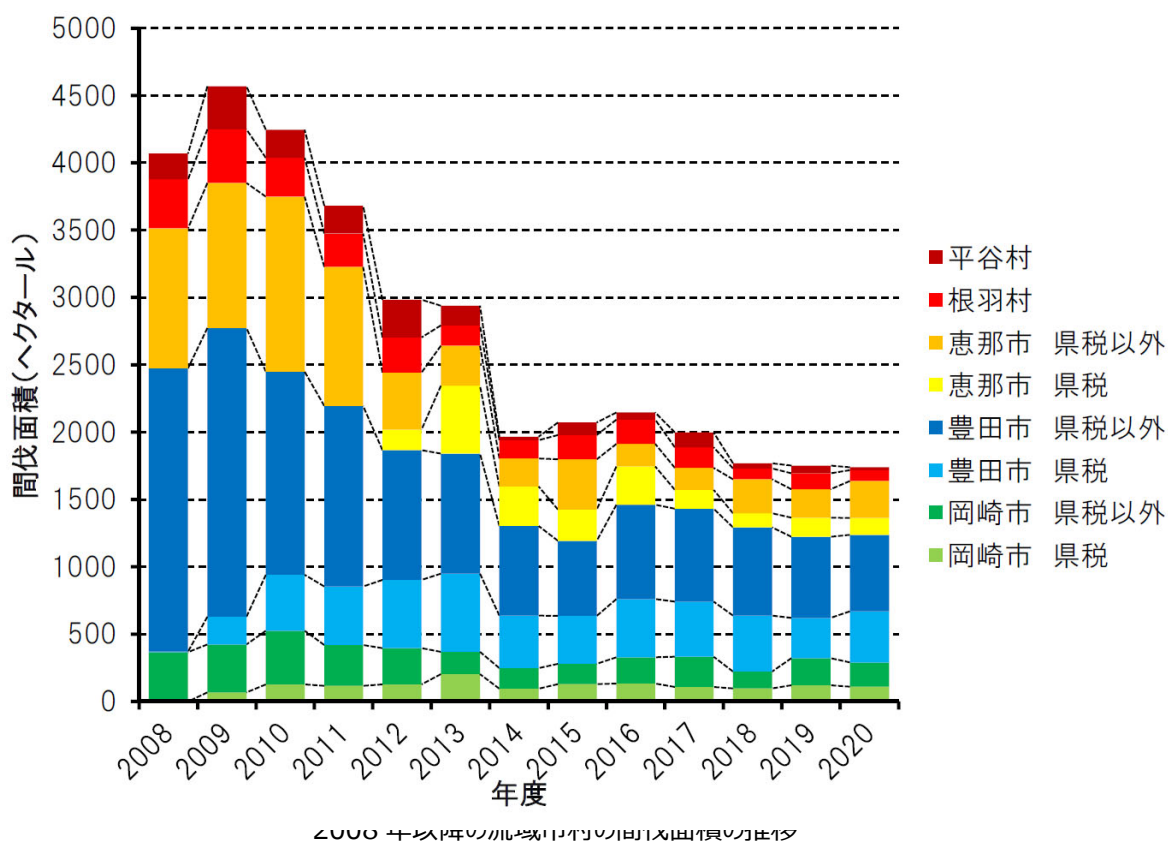
流域の自治体の森林施策の状況報告(豊田市の例)

2) 矢作川水系流域治水プロジェクトについて

- ・国土交通省が推進している「矢作川水系流域治水プロジェクト」について、事務局より紹介された。本プロジェクトは、事業を「氾濫をできるだけ防ぐ・減らすための対策」「被害対象を減少させるための対策」「被害の軽減、早期復旧・復興のための対策」の3つの対策に分け、国・県・市町が一体となって流域治水を推進することが示されている。

3) 流域市村の間伐面積の経年変化について

- ・2009年をピークに、流域の市村の間伐面積は減少し、2018年以降横ばいとなっている。2020年の流域の間伐の状況は、以下となっていた。
 - ①根羽村では、材価高騰のため、皆伐が増加している。
 - ②恵那市では、搬出間伐がメインであるが、補助金額が減少している。
 - ③豊田市では、コロナの影響で材価が下がったため、切置き間伐に移行したが、現在は材価高騰のため、皆伐が増加している。
 - ④岡崎市では、コロナ対策に予算を割かれたり、水源基金も作業道造成に比重が置かれたため、間伐面積の減少につながった。
- ・2 根羽村や豊田市では、皆伐が増える傾向がみられることから、今後は皆伐面積のデータも整理することを検討したい。



3.4 木づかいガイドライン

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

- 矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。
- 矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。
- 「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。
- 「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。
- こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所のかづくり＝プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。
- こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域の子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。

(2) 今年度の活動成果

1) 「木づかいガイドライン」の作成

- ・早生樹であるコウヨウザンの試験植栽に関する情報共有を行った。コウヨウザンは、早生樹で、1500本/haで植え付け、獣害対策をしながら森林資源の早期育成を図るものである。スギ・ヒノキの植栽密度が3000本/haであるため、間伐経費を抑えた低コスト施業につなげる。現在、根羽村の環境で生育が可能かの試験を行っている。
- ・その後の経過として、令和2年の12月に植栽し活着率はほぼ100%で生長は極めて順調であったが、令和3年11月から12月にかけてシカにより単木防護柵を引き上げられてしまい、苗木が食害を受け、残念ながらほぼ全滅状態となってしまった。
- ・現在、カブサイシン(辛子)溶液を噴霧して苗木を防護する方法を、全国森林組合連合会が事務局となって関係機関で検討している。食害を防げることは判明しているが、薬効期間がどの程度なのか試験中であり、根羽村では再度コウヨウザンの植栽を行い、カブサイシンを使用した獣害防除効果確認試験を実施する見込みである



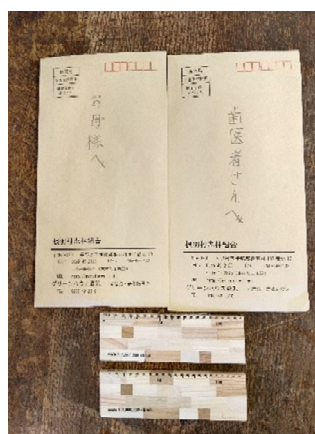
根羽村のコウヨウザンの植栽地遠景と苗

- 2) 木づかいと森林アクティブ系・癒し系プログラムによる市民創造型プロジェクトの実施
- ・山梨県の南都留森林組合では、森の学校の開催、様々な森づくりワークプログラムの開発、森の幼稚園との連携等、様々な木育活動を行っている。以前実施した当流域圏懇談会と神奈川県山北町との流域連携の結果として、現在両組合が連携して、森林アクティブ系、癒し系プログラムを南都留森林組合が、木のアイテムを活用したプレイスメイキングを根羽村森林組合が担当することで、それぞれの両組合の強みを活かした魅力的な里山活動を行うこととなった。
 - ・当面、山梨県道志村のキャンプ施設を対象に両組合のそれぞれの特性を活かしたプログラムや木のアイテム販売を展開していくこととなった。
 - ・その他、根羽村森林組合で実施している「わっぱづくり体験」を南都留森林組合でも実施できるようにプログラム実践指導を行った。この指導を通して「わっぱづくりテキスト」が完成した。



山梨県の南都留森林組合との連携 森林アクティブ系と木のアイテム系のプログラム交換

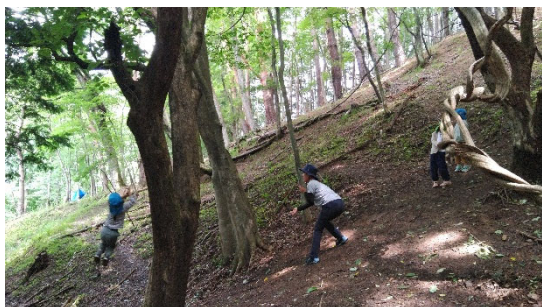
- 3) 「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の製作とその理念と製作方法を普及
- ・矢作川流域のあらゆる活動において、全体会議で配布された流域ものさしを活用している部会員がいる。部会員からは、この流域ものさしの更なる活用等の希望があることから、新型コロナウイルスの収束を待ち、改めて部会員が作成できるようなプログラムを計画したい。また、他河川への展開を「私の流域物語」と共に推進する考えであることを共有した。
 - ・根羽学園では、4年生の子ども達に「矢作川流域ものさし」を製作してもらい、併せて「私の流域物語」を作文してもらった。「矢作川流域ものさし」は誰にでも楽しく作れて、木の自然素材カラーが美しいことから子ども達にも好評であった。また、続けて作文してもらった「私の流域物語」も、ものさしに絡めて様々な思いが語られており、やはり、「流域ものさしと流域物語」の他者へのプレゼントは、子どもも大人にとっても大変魅力的で印象的な試みである。



根羽学園 4年生 流域ものさしの製作と私の流域物語のお手紙

4) 「森の民のこどもたち (NPO 法人 矢作川源流の森ねば) の作成

- ・「木を育てる」「木で作る」「木とくらす」「木と共に生きる」をテーマとしたパンフレットを製作したことで、森の育成から木材の生産、暮らしの中での木の活用などが周知された。また、木を育てて、伐採しそれを製材機にかけて建築部材を生産し、家づくりまで結びつけている木づかいの流れが簡単に理解されるように努めた。
- ・「森の幼稚園」という活動が世界で広がっており、日本でも同様の取組みが進められている。森の幼稚園的な活動により、田舎への移住者が増え、定住促進につながっているところがある。矢作川流域独自の森の幼稚園の構想を推進することで、将来の森の担い手づくりに結び付く可能性があることを共有した。



伊那市 高遠第二・第三保育園の森の幼稚園 生き生きとして山で遊ぶ児童



根羽学園 森と親しむプログラムと木のアイテムプレイスメイキング

5) 改正公共建築物等木材利用促進法について

- ・木材の利用を促進する対象として、公共建築物から民間建築物を含めた建築物一般に拡大する法律の改正を周知した。参考事例として、材を積極的に活用することにより山村の活性化に貢献していくことが明記されており、矢作川流域での活用が大いに期待できる。
- ・こうした法制度の改正の周知により、今後、学童施設や里山に矢作川流域材を活用した活動拠点施設及びトイレ等を設置して、里山等における木育活動の推進を図りたい。



名古屋市内の児童施設 愛知県産材のスギ材による板倉構法の拠点施設



森や海辺で木のアイテムがあることによりその地域の魅力が高まる

それも次世代の参加による木のアイテムづくりは、地域の魅力を自ら

創造している気づきを与える この意義はとても大きい

4. 次年度の活動目標について

課題	活動テーマ	次年度の活動目標
①人と地域 の問題	流域圏担い手 づくり事例集	<ul style="list-style-type: none"> ○持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集IV」を刊行する。 ○特に山、川、海のエリアと都市をつなぐ活動に着目して取材を行う。 ○川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。 ○事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。 ○ ○
	山村ミーティング	<ul style="list-style-type: none"> ○ガイドラインの作成においては、林業技術者に直接意見をうかがうなど、懇談会との連携を強化する（担い手の創出）。 ○矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、更に検討を行っていく。 ○矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「矢作川水源の山づくりガイドブック」の策定に取り組む。（山村ミーティングと森づくりガイドラインの協働）
	森づくり ガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> ○森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。 ○水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。 ○ ○
	木づかい ガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> ○矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。 ○矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。 ○「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。 ○「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。 ○こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり=プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。 ○こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域の子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。 ○神奈川県山北町において開催された「大人の木育」の講師を務めた流域連携から、現在南都留森林組合との連携事業がスタートした。今後、道志村のキャンプ施設を対象とした森林づくりワーク及び木のアイテムによるプレイスメイキングを進めていく。 ○学童保育、森の幼稚園、里山等で森づくりワークを進めていくにあたり、これらの活動拠点施設及びトイレが必要である。愛知県の学童施設に愛知県産材のスギ材が「板倉構法」として使われており、こうした事例を参考に矢作川流域材を活動拠点及びトイレ等の施設に活用していく。
②森の問題		